
セリナの恋

たのシイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セリナの恋

【Nコード】

N76570

【作者名】

たのシイナ

【あらすじ】

留学生の彼は切羽詰まった声で言った。「結婚しよう。すぐに一緒にしろよ！」遊び心から始まった若い男女の恋愛感情は、やがて……。

Ⅱ 前篇Ⅱ

サンフランシスコ湾に面した祖母の家のテラスから、霞んだような熱気の下に横たわる静かな海面を眺めていたセリナは、溜息を吐いて腰を上げた。

風のない午後だったので、前庭の半分以上を覆っている巨大な松の葉陰にいても、暑さはさほど変わらない。そろそろ日射しが西日に変わろうとしている時刻だった。

高田翔一からの電話は遅れていた。東京の尚書館文芸賞の発表内容が分かるのは、こちらの時間で十六時頃だから、どんなに遅くとも十六時半頃までには連絡が入るはずだった。

もし、だめだったらとセリナは、庭先の松の幹に背をもたせながら、次第に悲観的になっていく思いを一人でもてあまし始めていた。

「執筆家の登竜門のひとつともいえる尚書館文芸賞に入選できたら、俺たち結婚しよう」

と、翔一はこの一年間ずっと言い続けてきた。

「もし、賞に入らなかったらどうするの？ また一年待つのか？」
と、セリナは深刻な表情でキーボードを打ち続ける恋人の傍で、相手の負担に聞こえないような言い方で、たった一度だけ訊いたこ

とがあった。

翔一の左手の薬指に、平打ちの銀の指輪が嵌められていた。本来は結婚指輪として使用されるものらしかったが、ただシンプルで美しいという理由で、対^{つい}で求めたものだった。

一年前のある夕方、待ち合わせていたユニオン・スクエア前のビルの入口を入ってすぐの所に、アクセサリー売場があった。

翔一が遅れて来るのを待つ間、セリナは時間潰しにショーケースの中を覗いていた。

彼が来て、「なにを見ているんだい？」と訊きながら、銀の平打ちの指輪に目を止めた。「婚約しようか？」

出し抜けに、彼はそう訊いた。

「うん、いいわ」

同じように唐突な感じで、セリナも同意した。

翔一がジーンズの尻のポケットから無造作にドル紙幣を何枚か引き抜いて、指輪を二つ買った。両方で五十ドル出して、幾らかお釣りが来た。

ほんの出来心、遊び心で始まったことだった。

好きあっていることを隠すこともなかったので、翔一の留学仲間と酒を呑む席などで、彼は婚約を口にして、おめでとうと無理矢理

に仲間たちに言わせて面白がっていた。二人の婚約は、双方の親や親類を除いては周知の事実となった。

銀の平打ちの指輪は、初めのうちキラキラしすぎて指になじまなかった。常に違和感があり、その小さな存在が気になった。晴れがましいような、面映ゆいような、嬉しいような感情に、ちよっぴり諦めの気持ちなども混った。

大学で知り合って、単なる友達の一人だった若者が、いきなり婚約しようと言って買った指輪のために、セリナの人生が決まってしまったことに、彼女は戸惑いを覚えていた。

しかし、彼も遊びで、彼女も遊びで始まったことだったが、葉指の上の銀色の輪が日と共に少しずつくすんだ色合いになっていくにつれ、気持ちの方も固まっていた。

指輪がすっかり指に馴染み、時としてそこに金属の輪が嵌っているということすら忘れていることがあるようになると、周囲の者たちが二人は本当に結婚するのだと言い出し、するとそれはいつ頃の話なんだと質^{ただ}したりした。

したいときが年貢の納めどきさ、と軽く笑い流す翔一の傍で、セリナも、「そうよ、そうよ」と頷いて来た。

そんなとき、なかば人ごとのようでもあり、なかばなにかにすがり付きたいほど幸福だった。彼を信じていた。

そのうち翔一が、東京の尚書館文芸賞に応募するんだと言い出した。留学する以前から書き始めているものがある、こうしてサンフランシスコに来たけれども、ここでの仲間達の日常のエピソードを書き加えて完成したという。

「俺はこの賞に賭ける」

そう言った翔一の表情を見ていた時、初めてセリナの胸に一抹の不安が湧いた。結婚の時期が気になりだしたのは、その頃からだった。

西日が射し始めると、湾に面した前庭から日陰がなくなった。頭上を重く覆っている松の葉の匂いが一段と濃くなり、それに夕暮れ時特有の潮の香りが混じった。

西日を受けて海が銀盤のように輝いて見えた。裏の林で突然蝉が申し合わせでもしたかのように、いつせいに鳴き始めた。

ここはサンフランシスコ湾でも特に静かなエリアだった。しんとした、動くもののなにひとつない海辺の光景の中で、耳にする蝉の鳴き声は、かえってあたりの静けさを強調していた。

いい知らせなら、もっと早く電話が掛ってくるはずなのだ、とセリナはようやく現実的に事態を受け取り始めた。知らせが遅れているということは、賞の入選を逸したからに違いない。

翔一のことだから、入ればいつときだって無駄にせず、笑いを堪え切れない子供のような表情で、あちこちに電話をしまくるだろう。

「どっちになるか分からないけど、明日の夜は、セリナと酒盛りだ」と、昨夜遅く、酔いを含んだ声で翔一が電話をして来た。「入っても入らなくとも、そっちへ行くよ。そしたら二人で夜の海を眺めながら、酒を吞もう」

「大丈夫、入選するわ、絶対」

「いずれにしろ、俺は全力投球したからな。入る入らないは、もうどうでもいい」

口ではそう言いながら、期待と不安とがどうしようもなく滲みでた声で婚約者は言った。

「入選しなけりゃ、東京の奴らは才能をひとつ見落としたってことだよ。損をするのは俺じゃない、奴らのほうだ。やるだけのことをやったんだから……」

そして切羽詰まった声で唐突にこう付け足した。

「セリナ、結婚しよう。入っても入らなくても、俺たちはすぐ一緒になろう」

指に嵌った銀製の指輪を見詰めながら、セリナはその声を聞いていた。

「なにか言うことはないのか」と、彼が言っていた。

「あるわ、たくさん。でも明日の夜まで、とっておく」

入ったばかりの会社に辞表を出すのかとか、部屋を見つけたりしなければならぬことや、双方の親に二人が結婚することを告げる大仕事についての相談が山ほどあった。

「明日の夜か」

と、電話の中で翔一が呻いた。「長いな。明日の夜なんて来るのかな」

「眠ってしまえば、目が覚めるのはどうせ昼頃でしょう。あつという間に時間が経つわ」

「眠れればな。セリナに会いたい。セリナを抱きたい。なんでこんな時に会社休んで、婆さまの所へなんか行っちゃったんだ」

「シヨウが一人で執筆したがっていたからよ。シヨウの近くでうろうろしていると足手まといになると感じたから」

「悪かったな。しかしそれも終わった。なにもかも出し切っちゃって、すかーんと虚ろだ。セリナ、海が見えるのか？」

「ええ。黒い海面に堤防の裸電球、いくつも長い尾をひいて、ゆらゆら揺れてる」

「うん、そいつが俺にも見える。セリナの目で見ているものが、俺にはそのまま見える。明日の夜、会おう。明日の夜、俺たちは結婚する。いいね？」

そして翔一の電話は、セリナがサヨナラを言う前に切れた。セリナは出し抜けに幸福の絶頂にいる自分を見いだしてうろたえた。気持ち落ちつけるために、指輪を外してスカートの裾で磨き始めた。

自分がこの瞬間を待ち望んでいたことが、はっきりと分かった。結婚なんて形式にすぎないとか、したいときに年貢の納めどきだとか、口では翔一に合わせて、どうでもいいようなことを言ってきたが、あれはポーズだった。

自分は結婚が、喉から手が出るくらいしたかった。

しかし、黙っていてよかった。そんな素振りをほとんど見せないで来て良かった。翔一は押しつけがましい女は嫌いだから。

「おばあさま、明日お客さま、来ますから」

と、祖母の顔を見てセリナは言った。

戦後まもなく、この土地に移り住み、大事に使って来た蚊帳かやの中で、祖母は団扇うちわを使っている。

「男衆かね」

と、骨ばった手の動きを止めて、祖母が訊き返した。

「そうよ。結婚するのよ、その人と」

「それで、セリナを迎えに？　白馬に乗った騎士のような男衆だねえ」

祖母がそう言って笑った。

入れ歯を外して枕元に置いてあった。歯がない口元は、笑うと暗

い小さな洞窟に見えた。

「男衆は日本から、お見えか？」

団扇の動きを再開しながら、祖母が再び訊いた。

絨毯の上に蓐蔭を敷き、その上に布団を敷いた生活を続けている。
暗緑色の蚊帳は深い海底を思わせた。

あるかなきかの夜風のせいで蚊帳が揺れると、いよいよ海流のうねりのようにセリナの目に映った。暗緑色の海の底で、老婆はほとんど骨の原形そのものの姿で静かに横たわっていた。

「あら、わたし前に話したかしら……」

「東の方角から男衆が来るのは、よくないねえ」
ぽつりと祖母が言った。

「どうして？」

あけ放つてある窓から、夜の海が一枚の黒い布のように見えていた。

「方角が悪いからねえ」

「また、おばあさまの迷信が始まった。ここでは関係ありません。わたしは信じませんから」

「わたしが言うんじゃないんだよ。昔の偉い人のお告げなんだよ。ほら……」

「日本の昔話、何度も聞いたわ」
と、セリナは磨き終えた指輪を元の指に戻しながら、遮るように言った。

「ベルナルドは最近見えないねえ」
祖母は唐突にその名を出した。「今日は何曜日だい？ 御用聞きに来てもいい頃なのに」

対岸のフィッシャーマンズワーフで親子代々海産物を売っている若者のことが、祖母のお気に入りだった。ベルナルドは、セリナより数カ月若い、気さくな青年である。

「おばあさま、魚屋さんが来るのは明日の朝だわ、きっと……そして、おばあさまの霊感も信じる。だけど彼はね、悪い知らせを持って来るわけじゃないの。わたしと結婚するために来るのよ」

セリナは、蚊帳の中に手を差し入れて、やさしく祖母の脹脛ふくらはぎをさすった。老女の足はひんやりとしていた。骨を僅かに覆っている薄い皮膚は、妙にすべすべしていた。

そのすべやかな染みの浮いている薄い皮膚。すぐ裏側にある骨の感触が、セリナの指先にじかに伝わってきた。哀れさや愛しさが募ると同時に、老いというものに対する本能的な嫌悪や怯えの感情が入り混った。

セリナは夏掛けを祖母の腰まで引き上げると、そっと蚊帳から離れた。隣室に引きとったあとも、祖母の使う団扇の音がパタパタと聞こえていた。

西日の照り返しが激しさを増している。ほとんど猛々しいほどの光りの風景だった。

目に染みるほどの酷熱の気配が、湾全体を支配していた。汗がたえず流れ落ち、着ている薄地の衣類さえ、重く感じられるのだった。

耳鳴りのように頭の奥で唸り続けていたものが、実は裏庭から山に続く林の中で合唱している蝉の声だと気づいた。

その瞬間、蝉の鳴き声の中に携帯電話の呼び出し音が混った。セ

リナは携帯を手にして一呼吸置いた。

落選だった場合の慰めの言葉を、なにひとつ用意していなかった。深呼吸をしておいて、携帯を耳に押しあてた。

「俺だ」と、いきなり翔一の声が言った。「遅くなってごめんよ。入選した——」

声に笑いと興奮が感じられた。「それも特選だよ、セリナ。俺、いきなり特選だよ！」

相手の興奮が電話を伝ってセリナにも感染した。彼女は立っていることが出来ず、壁に背をもたせて、床に腰を落してしまった。なにも言えなかった。

翔一がなにか上擦り気味の声で、しきりに喋り続けていたが、彼女は煌めく銀色の海面だけを見ていた。

「もしもし？ セリナ、そこにいるのか？」

あまりに長いこと黙っていたので、翔一は不安に思ったのか、電話の中から訊いた。

「もちろんよ。おめでとう、ショウ」

ほんとうに嬉しくて堪らない。「とっても嬉しいわ！」

これでなんの障害もなくなったと思った。

昨夜は興奮であんな風に言っていたが、やっぱり入選を逸していたら、結婚の話はスムーズに運びはしないだろう。

「今夜、来るんでしょう？　待ってる。何時頃になる？」

不意に相手が沈黙した。それまで喋り続けていた翔一が、急に真顔になる様子が、セリナには見えるような気がした。

「どうしたの？」
不安感が募った。

「特選になるなんて、想像もしなかったからな」
翔一が再び喋った。声からは熱気のようなものが引いていた。「まわりの連中が、街なかへ俺を引っ張り出したがってるんだ」

「でも、約束した。二人でお酒呑むって。酒盛りするって……」

またしても沈黙が訪れた。先刻より長い間をおいて、翔一が言った。

「そうだったよな。酒盛りの約束したよな、俺」
興奮の消え失せた声。「分かった、行くよ。少し遅くなるかも知

れないけど、必ず行く」

それで電話が切れた。必ず行くと言った彼の声が耳に残った。

翔一が特選をとった！

踊り上りたい気持ちの底に、チカリと冷たいものが光った。嬉しいはずなのに、手放しで喜べない自分かもどかしかった。

晴れがましさの絶頂にいる恋人が遠かった。電話でうわずった声で喋り続けていた翔一の言葉が、出し抜けに甦る。

『これで俺も作家の仲間入りだ。サラリーマンにならなくて済む。尚書館文芸賞の特選なら、一人でやっていける……』

太陽に赤味が加わるにつれて、海上に風が吹きだした。海の上を一陣、また一陣と柔らかい風が掠めるようにして、幾分冷えた潮の香りを運んでくる。

最初の風の一陣が裏庭に吹き込むと、蟬たちが一斉にピタリと鳴き止んだ。

Ⅱ 後篇Ⅱ

翔一が到着したのは、夜の十時を少し回った時だった。

待ちかねたセリナの目に真っ先に映ったのは、手にしたウイスキーのボトルだった。ボトルの中の液体が、翔一の胸のあたりでチャップと音を立てていた。

「呑みながら来たんでしよう」

セリナはボトルから、婚約者の顔に視線を戻しながら言った。

翔一の顎のあたりに、うつすらと無精髭が伸びていた。そのせいか顔全体に影のようなものが漂い、翔一はいつもより引きしまった表情をしていた。

「ストリートカー（注釈…単車体の電車のようなやつです）の中でね、一番後の座席で呑んでいた。でも、ストリートカーが揺れるんで、零れちまうほうが多かった」

祖母は蚊帳の中だったので、前庭の松の下に出しておいた木製のベンチへ翔一を案内した。

「腹空いてないんだ。ツマミもいらない」

翔一がベンチの端に、なにか大切な物であるかのように、ボトルを置きながら言った。

セリナは頷いて、用意してあった二つのグラスに碎氷を入れた。そこへ翔一がウイスキーを注ぎ入れた。

「乾杯」

と、彼がグラスを上げた。

「おめでとう、特選！」

セリナが、そのグラスに自分のを軽く触れながら言った。「嬉しいこと、二つになるね、これで」

「二つ？」

グラスの陰から、翔一が訊き返した。

「わたしたち、結婚するんでしょ？　すぐに」

「ああ、そのことか」

翔一がそう言ってグラスの中味を一気に喉へ流し込んだ。そして、それが彼の癖なのだが、酷く顔をしかめて呑み込んだ。

「仕事どうしようかと思って……」

と、セリナは実際には辞める決意が固まっていたが、そんな風に甘えた感じで言った。

「どうするって？」

二杯目のウイスキーをグラスへ注ぎ入れながら、翔一が訊き返した。

「先のことは、どうするか分からないけど、辞めようかなって考えているの、いろいろ準備もあるし」

彼の動作が一瞬止まる。その横顔に、苦痛としか言えないような、ある表情が表れ、そのために彼は別人のように見えた。

「なにも仕事、辞めなくてもいいんじゃないか？」

再び動作を再開しながら、少し掠れた感じの声で翔一が言った。
「急になにかが酷く変わるってわけでもないんだしさ」

「それはそうだけど」

と、夜の海からの潮風を顔に受けながら、セリナは恋人の横顔に瞳を凝らした。

家から零れ出ている蛍光灯の光りの先端が、蒼白い輪郭を浮かび上がらせていた。

彼は頬の汗をむやみに拭い、たてつづけにグラスをあおった。

「おばあさまに、わたしたちのこと話したの」

と、セリナは声の調子を半音ほど意識して上げた。

「そう、なんて言ってた？」

黒い動かない海を、翔一は目をすばめて見ていた。

「白い馬に乗って来る騎士みたいだって」

「白い馬の代わりに、ウイスキーのボトル抱えて来た」

と、翔一が苦笑した。「セリナの婆さま、腰抜かすかな」

「それくらいじゃ驚かない。おじいさまって人が一升酒呑む人だったらしいの……」

翔一は骨ばった肩のあたりを揺すりながら、セリナの話に耳を傾

けていた。

「俺たちのことだけど」

セリナが祖父のことを喋り終わると、唐突に翔一が言った。

その声の調子に、セリナはハツとして彼を見詰めた。なにか恐ろしいことが、彼の口について言われようとしている——そんな差し迫った予感があった。

なにかすぐにでも別のことを言わなければならなかった。

「明日、帰る？」

「そうだな、朝ここを出たい」

「じゃ、わたしも一緒に帰ろうかな」

「どうして？　せっかく休みをとったんだから、セリナはここにいたらい」

「一人でいても詰まらないもの」

翔一は酔がまわったのか頭を深く両膝の上にたれ、長いことじっとしていた。

「それにすることが色々あるから。不動産屋をあたったり……」

翔一の指は、彼の薬指の指輪を撫でていた。それは完全に無意識の仕草だった。

「……わたしの両親にも会ってもらわないと。ねえ、会ってくれるでしょ？」

両膝の上に低く垂れていた頭が上がった。

「堤防のほうまで、少し歩こうか」

出し抜けに翔一がそう言い、同じような唐突さで立ち上った。

セリナもつられて慌てて立った。黒光りする海面の所どころに、青白い燐光が散っていた。

「夜光虫だ」

と、翔一が眩いた。

それきり二人は長いこと押し黙って歩いた。

見詰めていると、黒い波間の燐光の数が増えていった。目がそのあたりの暗さに慣れるに従って、夜光虫の数が増した。

セリナは、翔一の息遣いを聞いていた。二人は堤防の突端に並んで膝を抱いて坐った。

翔一からは汗の匂いもしていた。時々呼吸が不規則になって、息を詰めるような気配もした。

彼がなにか言いたくて、言い出しかねているのが、セリナには分かるのだった。

「あ、遊覧船が帰る」

と、ずっと先を指差してセリナが言った。

サンフランシスコ湾内に浮かぶアルカトラズ島の向こうに、明かりを灯した船が小さく見えた。

「この堤防の先、深さ、知ってる？」

セリナが、沖へ向かって十ヤード（約9メートル）ほどの位置に

視線をあてながら、静かに言った。「あのあたり」

翔一が顔を上げ、暗い海上へ視線を泳がせた。

「深いのか」

「とても深い。ドロップ・オフになっていて、いきなりストーンと陥没してるの」

「どれくらいあるんだろう」

翔一が興味を抱いた。

「たぶん二百ヤード」

「いきなり二百ヤード落ちこむのか」

「そうよ。泳いでいると分かるわ。わたし、子供の頃から、学校休みに入るところで遊んでた。

あの辺りは三ヤードから深くて五ヤードだから。いきなり水の色が変わるのよ。水温も」

「怖くないのか」

「体の下に二百ヤードの奈落があると意識したら、もう行けないわね。パニックになっちゃうもの。水の色が黒いのよ」

翔一の目はその辺りの海上に釘付けになる。

「結婚したくないんでしょ？ 本当は」

自分の耳にも、他人のように響く声で、セリナが不意に言った。翔一の体が一瞬固くなった。「そのこと、言い出しにくかったんでしょ？」

「分かったのか……」

低い、聞き取れないような声で、翔一は言った。

「昨日、なんとなく、そんな予感がしたの」

「しかし、昨日は酔っていたが、俺、本気だったんだ。尚書館文芸賞取っても、取らなくても、セリナと一緒になるつもりだった。一緒になりたかった」

「そうじゃないのよ。一緒に居ただけよ。心が騒いで、不安で、なにかを待っていたから、一人でいたくなかったのよ」

「俺、長いこと、セリナを待たせたから」
翔一が項垂れた。

「シヨウはこの一年ずっと心が騒いでいて、不安で、なにかを待っていたわ。

そして、そのなにかを今日手に入れたのよ。その途端、一人でいることが淋しくなくなった。そういうことじゃない？」

セリナは指輪を見詰めた。

「約束は守るよ。いずれセリナとは一緒になるつもりだ。ただ、今すぐにではなく……」

セリナは遠い対岸を探そうと、その辺りに視線を這わせた。サウスリート辺りの灯りが、薄ぼんやりと見えた。

「約束なんてしないほうが、いいんじゃないかしら」

溜息のようにセリナが言った。「そういう気分になったとき、プロポーズしてみてもよ」

翔一の肩から力が抜けるのが、隣にいてセリナには感じられた。

「ねえ？ ショウ。この指輪、外してもいいかしら」

翔一はいいとも、悪いとも言い出しかねていた。

セリナはゆっくりと平打ちの銀の指輪を指から外した。それから立ち上ると、十ヤード先の海面に向かって、それを投げた。

投げたあと息を殺して、そのあたりを凝視したが、小さな水飛沫も指輪の落ちる音もなかった。暗い海は、音もなくセリナの指輪を呑み込んで、表情ひとつ変えないのだった。

翔一も同じように立ち上った。

かなり苦勞して指から指輪を引き抜くと、大きく手を振り上げた。銀の指輪は海の中というよりは、暗い夏の夜空に呑み込まれたような感じで、唐突に姿を消した。

翌朝、翔一は町へ帰って行った。別れ際、指輪のない指をしきりに気にしていた。

「なんだか変な感じだ。妙に不安だ」

「大丈夫よ。すぐに慣れるわよ」

指輪を嵌めた最初の数日の異和感を思いだしながら、セリナは笑った。

翔一も、その感じを思い出したのか、
「締め付けられる感じも抵抗があったけど、なにもなくなっちゃう
つてのも、変な感覚だな」
と言って、束の間不安な目をした。

ストリートカーの窓からセリナを見おろしている顔にも、まだその不安気な表情が残っていた。

『近いうちに日本へ帰るんでしょう？ いつ戻って来れるの？』
と、セリナは訊くことが出来なかった。

ストリートカーが動きだし、翔一の顔が少しずつ小さく遠ざかって行くのを、いつまでも見送っていた。

家に戻ると、祖母が冷たい茶をテラスに置きながら、セリナを迎えた。

「男前だったねえ」

祖母はそう言って、朝の湾を眺めた。

「おばあさまの靈感、当たったみたい」

そう言いながら祖母の横に座る。泣き出さずにいられることが、不思議な気持ちだった。

セリナは、昨夜投げ捨てた指輪が沈んでいる辺りの海を眺めた。

自分たちが歳をとったあとも、あの二つの指輪は海底に沈んでいるのだろうか。

自分たちが死んでしまったあとも、平打ちの銀の指輪は海の底で眠っているのだろうか。

そう思うと居た堪れない気持ちになり、セリナはせき込むようにして泣き出した。

祖母は慌てて孫娘の頭を抱え込んだ。そして、しきりに撫でた。
「おうおう、おうおう」

祖母の痩せこけた膝の上が、セリナの涙で濡れた。

喉の奥から絞り出すようにして大きな泣き声を出すと、セリナは顔だけ上げた。

彼女の泣き声に合わせたように、裏庭では蝉たちの合唱が始まっていた。蝉の声を聴きながら、セリナは声をしゃくり上げた。

祖母の顔を見上げる。皺くちな手からハンカチを受け取り、涙を拭いながら湾を見つめた。

「魚屋がもうじき来る頃だね」
と、祖母は言った。「日射しが強くなってきたし、中に入るかね？
セリナ」

海は今日も穏やかで、遠くに何隻かの船を浮かべていた。

「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7657o/>

セリナの恋

2011年9月8日14時20分発行